

です。私はピアノが大好きでしたからね。見よう見まねでやってるうちにバイエルが弾けるようになったんです。学校に田尻先生という方がおられたんですが、その先生が特別に私にだけピアノのカギをくれていたんで、自分のピアノみたいに一日中弾いていました。とにかく好きでしたからね。それで学校時代にピアノ一台を弾き崩してしまいましたよ。

認められた才能

私の父は厚生省に勤めていましたので、私を政治家にしたかったらしいんですよ。私は小さい頃から「音楽家になる」と言っていたんですが、八代なんかいて立派な音楽家になれるものかよく言われたんです。しかし、私には野心がありません。絶対になんか「絶対になんか」という気持ちが強くなりまし

た。それから上京して武蔵野音楽大学にはいったんですが、父も亡くなり、家の方が経済的にとても困っていたんです。それでアメリカ軍のクラブでジャズピアノを弾くアルバイトをしました。そこでジャズみたいな新しい音楽に強くひかれま

してね。収入もかなりあるということ、学校をやめてしまったんです。それからアメリカ軍のキャンプでピアノを弾いていたのですが、それだけでは満足できなくなりましたね。そこをやめて東京のいろんなバンドで仕事をしました。

その時、スマイリー小原とスカイライナーズというバンドにピアニスト兼アレンジャーとしてはいったんです。その頃フジテレビで「ヒットパレード」という番組をやっていたんですが、その番組の音楽を担当しました。この時、作曲、編曲の能力を身につけたんです。またこのバンドが渡辺プロダクションに所属していたものから、同プロ所属歌手のレコーディングのアレンジをやったんです。

それで一番最初に手がけた田代みどりの「バイナッブル、プリンセス」がヒットしましてね。私もアレンジャーとして一応認められたわけです。

しかし独学ではやはり無理だから正規の教育が必要だと考えるようになりましてね。レコーディングのオーケストラのメンバーから岡伊政磨先生を紹介してもらって、個人レッスンを受けたんです。それで岡先生のところでクラシックを勉強しながら、テレビやレコード、映画の仕事をやりました。

その頃、二十四、五歳でしたから私の場合は早くから恵まれていましたね。

をやっています。

作曲家が作ったメロディに肉付けをし、音楽的にオーケストラの譜面にするのが編曲家です。メロディだけなら誰にでも書けます。

そして良いメロディを書くのが作曲家であって、作曲家が音楽的にすべて書けるかというところではないのです。メロディに詩をつけ、編曲家が音楽にしてコードができるわけですから、編曲家が八〇%位のウエイトをもっているんですよ。

洋服にたとえてみると、布地がメロディとすれば、裁断してちゃんとした洋服にするのがアレンジャーです。ですからアレンジャーが変われば、布地は同じでもいろんな洋服になるということです。洋服のデザイナーには布地を作る能力、裁断して縫う力が必要のように、アレンジャーも作曲できる能力が必要なので、作曲家としての力があってこそ一流の編曲家になれるんだと思いますね。

クラシックの場合は作曲、編曲が同時に行われますが、ポピュラーの場合はそれが分業になっています。みなさんは作曲家が全部やっていると誤解している方が多いと思いますが、作曲家はメロディライターであって、今流行のシンガーソングライターは八〇%位は譜面は書けません。どうしてかという、みんなが歌いやすいメロディ、大衆の中にはいつける音楽というものは、専門的な教育を

それから一九六六年に「君といつまでも」でレコード大賞編曲賞をもらいました。六七年「ブルーシャトウ」、六八年「恋のしずく」、七十年「今日でお別れ」など、日本の大きな賞のグランプリはほとんどもらっています。

一〇〇%の返答

やはり地方にいと音楽の刺激がありませんね。東京には素晴らしい音楽家がたくさんいますからね。私が上京して初めてミュージシャンと会った時、「この人たちは追い越して日本一の音楽家になるには並たいていじゃないぞ」と思いましたよ。それで暇さえあれば東京の音楽家を追い越すために、かなり勉強しましたよ。私はいくつかのバンドでピアノを弾いていたんですが、そのバンドで一番うまくなれば、いつかは頂点に立つと考えたんです。この世界では必ず引き抜きがあるんですよ。スカウトですね。「あそこの彼はうまい」という話がある、いいところのバンドから誘いがあふ。だから自分に与えられた仕事に対しては、いつも一〇〇%答えようと思いました。このことは音楽界だけでなく、あらゆる分野においても大切なことではないのでしょうかね。今から頂点をめざそうという人は、自分に与えられた仕事には精魂をかたむけ、一〇〇%答えて返すという気持ちが必要ですよ。

を受けた人にはできないんですよ。

教育を受けるとアカデミックな音楽になり芸術となります。芸術と大衆音楽というのにはちよっと感じが違います。

映画音楽にしても、ニーノロータの「ゴットファーザのテーマ」、ミッシェル・ブルマンの「シェルブルーの雨傘」と、サイモンとガーファントルの「サウンドオブサイレンス」とは根本的に違います。歌い手がギターを弾きながら作った音と、専門教育を受けた人の音とは全然違いますよ。どちらが良いかは決められません。作曲家の音楽はオーケストラで演奏するとすばらしいし、シンガーソングライターのは歌うとすばらしい。だからシンガーソングライターが、歌うことのみを考えてつくった歌が大衆と密着したポピュラーであり、ちよっと離れたのが芸術ではないでしょうか。私も歌謡曲を作ろうと思えばできますよ。しかしベートベンやショパンが頭の中にあって抵抗感があるんです。価値観が違うんですよ。だから編曲はできても作曲となると疑問がわいてくるんです。

私は小さい時から古賀メロディで育ってきたから流行歌のアレンジはできません。特に勉強したわけではないのですが、日本人であるから体の中にそういうメロディがはいっているんです。インドやアイルランドなどこの国にもその国のメロディがあるわけです。それが日本では演歌です。

私はたくさん賞をもらっています。が、一作一作を一生懸命にやっていますから、「この作品は苦勞してよかったな」という思いはあります。ほとんどの歌手の仕事を手がけましたが、ヒット曲だけでも二百曲位はあるんじゃないですか。好きな事を一生懸命やるんですから苦勞したという感じはありません。ただ上京した時、東京の音楽の刺激に打勝つことが苦勞といえ苦勞でしょうからね。

編曲家とは

私は、オーケストラで指揮棒を振っているんですが、今の団員は、ほとんどが芸大卒の演奏家なんです。指揮者といえば、軍隊では大将ですからね。だから音楽を自分のものにしていないと皆をひっぱっていきません。ついてきませんよ。ですから私は、学校を卒業できなかった分だけ、何倍も勉強したんです。音楽大学の学生は、本では勉強していてもオーケストラを振る機会はありません。自分で書いたものをオーケストラで音を出すということはほとんどないでしょう。私はオーケストラを振りながら、自分で書いて勉強していったわけですから、それだけ自分の身についているんですよ。だから体得しているということ、は強いです。

私は今、日本アレンジャー協会の理事

は空港への道路なんです。あれはちよつと狭いのじゃないですか。阿蘇のような世界的な観光地もありますので、空港も国際化するでしょう。だからもう少し広げてもらいたいですね。

それから、この前帰った時にびっくりしたんですが、八代の妙見さんの祭りで、若い人たちが多数参加しているんですよ。とてもうれしかったですね。県内にもこのような伝統ある祭りが数多く残っていますね。だから若い人たちに祭りを受け継いでもらって、ますます盛んにしてもらいたいと思います。

これはいいことですし、必要なことです。また熊本のすばらしい自然、豊富な観光資源を県民一人一人が大切にしたいですね。

主な受賞

- (1)一九六六年 レコード大賞編曲賞 (君といつまでも)
- (2)一九六八年 レコード大賞編曲賞 (恋のしずく)
- (3)一九七二年 歌謡大賞グランプリ (瀬戸の花嫁)
- (4)一九七五年 東京音楽祭グランプリ (千曲川)
- (5)一九七六年 FNS歌謡祭最優秀編曲賞